子育てしながら冒険者します

異世界ゆるり紀行 19

Minazuki Shizuru
水無月静琉

マイル
タクミの契約獣となった
フォレストラット。
ジュール
タクミの契約獣となった
フェンリル。小型にもなれる。
エレナ
水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。
ボルト
タクミの契約獣となった
サンダーホーク。
ベクトル
タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなれる。
フィート
タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。
タクミ・カヤノ
異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。
ラジアン
タクミの契約獣となった
グリフォン。
アレン
水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。
登場人物
CHARACTER

第一章　アル様と遊ぼう。

僕は茅野巧。元日本人。

何故、〝元〟かというと……エーテルディアの神様の一人、風神シルフィリール――シルが起こしてしまったうっかり事故のせいで死んでしまったからだ。

その責任を感じたシルが、僕をエーテルディアに転生させてくれた。シルの眷属としてね。

そして、エーテルディアにやって来たのだが、降り立ったのは危険な森の中。さらにそこでは双子の子供を保護するなど、初っ端から慌ただしい日々が始まった。

後に、双子は水神様の子供だと判明したが、肝心の水神様とは連絡が取れず、僕は自分の弟妹として育てることにした。

子供達――アレンとエレナと名づけた二人は、それはもう能力抜群で、子育て初心者の僕から見ても優秀な子供達だった。

そんな子供達といろんな国や街、さらには山の中や海の中まで冒険して暮らしている僕達は、先日ガディア国へと帰国した。

まずはベイリーの街に行き、後見家の一つであるリスナー家に。王都に戻ってきてからももう一つの後見家のルーウェン家と、さらには王家にとお土産配りに勤しんだ。ちなみに、王家へのお土産配りでは、仮契約獣のリヴァイアサンであるカイザーの身分証を強請ってきた。

そして翌日、カイザーの身分証がルーウェン家に届けられた。

「タクミ！　あれはない！」

ガディア国の第三王子であるアルフィード様――アル様が直接持ってきてくれたのだ。しかも、文句を言いながらね。

「おはようございます。アル様」

「「アル様、おはよう～」」

「……おはよう」

「ナジェークさんもおはようございます」

「タクミさん、おはようございます。急な訪問で申し訳ありません」

もちろん、近衛騎士でアル様の護衛であるナジェーク・イグニスさんも一緒だ。

「いえいえ、先触れの手紙はいただいているようなので、大丈夫ですよ」

転移の魔道具に設定された認識コードのお知らせと試運転も兼ねて、王族プライベートの転移の魔道具から、ルーウェン家の転移の魔道具へと、昨日のうちに手紙が届けられたそうだ。

そこにアル様が今日、ルーウェン家に来るという話も書かれていたようだ。

そうして、やって来たアル様が、対面早々にカイザーの身分証を渡してくれたのだ。

挨拶よりも先に。文句よりも先にね。

「改めて、タクミ。あれはない！」

「あれって、宝石類のことですか？」

「それ以外に何がある！」

昨日の謁見後、僕は王族宛てに転移の魔道具を使って小箱を送った。

『細波の迷宮』で手に入れたオニキスや人魚族の里で貰った真珠などをたっぷり入れてね。なので、その文句だろう。

「あれは渡し忘れたお土産ですね」

「だから！　あのような高価なものは受け取れないって、何度も言っているだろう！　そして、転移の魔道具を稼働させろよ！」

小箱を送った後、僕が所持する転移の魔道具に着信の合図があった。

だが、僕はあえて《無限収納》から魔道具を取り出さなかった。そうすれば転送不可になるのだ。だって、きっと小箱を送り返そうとしているのだろうと思ったからな。

「やっぱり送り返そうとしていたんですね。でも、あの真珠はゴミらしいですから、高価なものじゃないです。なので、問題ないですよね」

「はぁ!?」

アル様が〝何を言っているんだ？〟と言わんばかりの表情で、僕達のほうを見てくる。
「知り合いに人魚族がいまして」
「いや、待て！　話の始めから既におかしい！　人魚族はそう簡単に会えぬ種族だぞ」
「海辺にいたら、向こうから会いに来ました」
「いや、本当に待て！　人魚族のほうから？」
「で、人魚族の里に招待されて、行ってみました」
「いや、もう、全てがおかしいからな！」
アル様が突っ込みを諦めない。
「そこで、ゴミの処分をお願いされたのですが……」
「いや、何で招待されてゴミの処分を頼まれるんだよ！」
アル様の突っ込みが激しい。でも、確かにその通りだよな～。
招待されて行ったら、ゴミを渡される……うん、おかしいな。
まあでも、水神様の眷属からの助言だったみたいだし、巫女姫様はゴミを渡すことに恐縮していたんだよな～。いや～、懐かしい。
「まあ、そのゴミっていうのが、魚の魔物の骨とか鱗とか、海草とか貝殻とか真珠だったんですよね」
「ゴミ？　ちょっと待て、ゴミ？」

「骨とか鱗は武器の材料になりそうなもの。海草は薬に使えそうなものでしたよ。だけど、人魚族にとってはゴミらしいです」
「……そうなのか？」
「真珠は、食用の貝に偶に入っている石……とのことです」
「はぁ!?」
人魚族にとっての真珠の価値を知り、アル様は驚愕の表情をしていた。
「というわけで、大量に持っています。少し引き取ってください」
「……情報が凄まじくて、処理が追い付かない。……そうか、ゴミか」
人魚族の里二つ分のゴミという名の素材は、《無限収納》にたんまりとある。なので、減らすのを手伝ってほしい。
「魔物の骨とか鱗も引き取ってくれませんか？」
「……」
冒険者ギルドに売ってもいいのだが、一度に売りに出すと値崩れを起こすだろう。なので、売るにしても少しずつしか出せないんだよな～。
「はぁーーー……」
アル様は長ぁーーーい溜め息をつく。
親子だな～。ガディア国国王のトリスタン様とそっくりだ。

「タクミが持っているもので、売っても良いというものの種類と量の表でも作っておいてくれ。それを見てこちらが買い取りたいものを検討する。そして、数と価格を提示するから、タクミが了承できるものを売ってくれ」
「わかりました。すぐに用意して届けますね」
ありがたい申し出ではあるが、適正価格を提示してくるんだろうな～。値引き交渉に応じてくれるといいんだけど……。普通は高く売りつけるんだろうけど、僕はそんな気はないのだ。
「あ、昨日送ったものは買い取りに出したものではないので、くれぐれも金額の計算とかはしないでくださいね」
「あのな！　だから、ああいったものは受け取れないんだって！」
「じゃあ、あれだ！　パステルラビット達を飼う場所！　多少の改装などはしないといけませんよね？　それの費用にしてください！」
「ああ……それの寄附という形なら問題ないのか？」
「決まりですね！」
お土産とは違った形になってしまうが、真珠などの押しつけは解決かな？
「それにしても、トリスタン様は仕事が早いですね。翌日に身分証ができるとは思いませんでした」
「すぐに必要だろう」

「まあ、早ければ早いほど嬉しいです。――はい、カイザー。失くさないようにな。あと、お礼もちゃんと言ってな」
僕はそう言って、受け取った身分証をカイザーに渡す。
「おぉ、これで我は街に出入り自由になるのだな。――アルサマと言ったか？　礼を言う」
「「ありがとう～」」
身分証が早く欲しくてそわそわしていたカイザーは、とても嬉しそうにお礼を言った。ついでに子供達も。
「ああ、カイザーにはちゃんと紹介していなかったな。そちらはアルフィード様。この国の王子様だから、失礼なことはしないようにな」
「む？　……アルフィード？　タクミはアルサマと呼んでいたよな？　アルサマという名ではないのか？」
「「……」」
「「ふふっ」」
カイザーのとんでもない勘違いに僕とアル様、ナジェークさんは絶句してしまった。
だが、アレンとエレナは笑っていたな。
「えっとな、アルフィードという名前の愛称が〝アル〟ね。それに〝さん〟とか〝くん〟の敬称の仲間の〝様〟をつけて〝アル様〟だよ」

「おぉ！　そういうことか！　イーサンのように〝さん〟をつけるなー！　という感じで〝アルサマ〟という名だと思ったぞ。アル様だな！　わかったぞ」
「……」
確かにレギルス帝国で出会った迷宮管理本部のイーサン殿には、しきりに〝さん〟付けで呼ばないでと言われていた。なので、混同してしまったのだろう。
僕は気を取り直して、アル様に向き直る。
「アル様、すみません」
「いや、大丈夫だ。うん、だが、そういう勘違いをされるかもしれないと、学習したよ」
「ははは、でも、そうあることではないかな～とは思いますけどね」
アル様にとっては貴重な体験だったのだろう。笑って許してくれた。
「タクミ、タクミ！　身分証なのだが、海に帰ってから我が一人の時に使う前に、タクミと一緒にいる時に使ってみたいのだが！」
「それもそうだね。なら、今から街を出て、夕方に帰ってくる感じでどこかに行こうか」
「「わ～い、行く～」」
カイザーが身分証を片手にうきうきとしている。
確かにカイザーが一人の時にぶっつけ本番で臨むより、一緒にいる時に一度試してみるのは僕も賛成だ。

「アル様、これから暇（ひま）ですか？」
「ん？　切羽詰まった予定はないぞ。むしろ、空けてここに来ているな」
「じゃあ、一緒に出かけませんか？」
せっかくなので、アル様も誘ってみた。
「「おぉ～、一緒に行こう！」」
「そうだな～。――ナジェーク、近場で日帰りなら、問題ないな」
「駄目だと言っても行くんですよね」
「私のことが良くわかっているじゃないか。――タクミ、行こうじゃないか」
「……ナジェークさん、すみません」
安易に誘ってしまったが、護衛であるナジェークさんの迷惑まで考えていなかった。申し訳ないことをしたが、ナジェークさんも絶対に駄目だという表情をしていないので問題ないのかな？

◇　◇　◇

「「アル様、どっちに行く？」」
「はぁ!?」
思い立って街を出た僕達だが、行き当たりばったりな感じでここまで来たので、まだ行き先が決

まっていなかった。
「張り切って出てきたのに、行き先が決まっていないのか？」
「「うん！」」
呆れるアル様に向かって、アレンとエレナは晴れやかな笑顔で肯定する。
「「どうしようかね～」」
「日帰りなのであろう？　ならば山はちと遠いので、あっちの森ではどうだ？」
「「そうだね～。――アル様、それでいい？」」
「……ああ、構わないぞ」
カイザーの助言により無事に行き先が決まった僕達は、森に向かって歩き出した。
そして、歩き出してすぐに――
「「あっ！」」
アレンとエレナが何かを見つけて駆け出す。
「ん～、薬草か、魔物か……どっちだろう？」
「魔物の気配はないので、我は薬草だと思うな」
「……いや、タクミもカイザーも、そんな暢気にしていて良いのか？」
「まあ……慌てる必要はありませんよ～」
「そうは言ってもな～」

アル様は僕達と一緒に迷宮に行ったことがあるのに、まだ子供達の行動に慣れていないようだ。
「「いっぱいいたよ～」」
しばらくすると、アル様の心配など関係ないという感じの様子で、アレンとエレナが晴れやかな笑顔で戻ってきた。
「はぁ!?」
「……」
しかも、六匹ほどのパステルラビットを連れてね。
アル様は驚きの声を発しているが、ナジェークさんは絶句している。
「魔物のほうであったか～。パステルラビットの気配は微弱でわからなかったぞ」
「ははは～」
リヴァイアサンにもわからないくらいの気配なのに、どうしてアレンとエレナには存在がわかるんだろうな。毎度のことながら、不思議だ。
「アル様、お城でパステルラビットを飼う計画って、増えても大丈夫ですか？」
「……は？　いや、増える分には問題ないが……増えるのか？」
やはりパステルラビットふれあい広場のキャストが増えるぶんには良いだろうと、アル様に話を振ってみた。だが、何故かアル様は不思議そうな顔をする。
「「ここにいるよ？」」

「そうだが、このパステルラビット達がか？」
「ダメなの？」
「駄目ではないが、このパステルラビット達が嫌じゃないのか？　というか、飼い慣らしていないパステルラビットは、逃げるだろう？」
「逃げないよ～」
「逃げてないでしょう？」
「はぁ!?　……本当だな。いや、何でだよ！」
アレンとエレナにそう言われたアル様は、改めてパステルラビットを観察してから唖然としていた。普通のパステルラビットは懐くのに時間が掛かるようだが、ここにいる子達は既に懐いているからな。
六匹いるうちの一匹はアル様の足下に行き、まるで撫でろと言わんばかりにすり寄っている。
「アル様、抱いて、抱いて！」
「えぇ？」
「ほらほら、ナジェ兄も！」
「私もですか？」
アレンとエレナは、アル様とナジェークさんにパステルラビットを強引に抱かせていく。
パステルラビットを三匹ずつ抱えたアル様とナジェークさんは、どうしていいのかわからないのか若干戸惑っている。
「ほら、大丈夫でしょう？　僕達は逃げ隠れするパステルラビットを見たことがありません」
「いや、おかしいだろう！」
「そう言われても……」
これはどうしてだ……と聞かれても、原因はまったくわからないんだよ～。
わからないものは答えようがないので、パステルラビットの懐きについては話を打ち切ることにする。
「そういえば、ナジェークさんはカイザーのこととか、その他いろいろなことは知っているんですか？」
そして、会話でうっかり話してはいけないことはないか確認していないことを思い出し、直接聞いてみることにした。
「ナジェークにか？　大体のことは話してあるぞ」
「大体？　ということは、秘密にしていることもあるってことですね」
「いいや、ナジェークは私の護衛だし、ルーウェン家とも縁があるから、全ての情報を共有してもいいと言われている。ただ、タクミのことに関しては、いろいろありすぎて話し忘れているものがあるかもしれないってだけだな」
「……」

果たして、伝え忘れるほどの秘密の情報があっただろうか？
……さすがにそこまではないはずだ。
「とりあえず、制限はないってことですね」
「ああ、その認識でいい」
前から思ってはいたけど、ナジェークさんは王族に信用されている優秀な人なんだよな～。
「「あっ！」」
「「っ！」」
ナジェークさんについて考えていると、アレンとエレナが何かを発見したのか、声を上げて駆け出す。すると、アル様とナジェークさんがびくりと肩を揺らしていた。
「ふむ、今度は薬草のようだな」
「アレン、エレナ、何があったんだ？」
「「氷華草があった！」」
「いやいやいや、おかしい！　氷華草の生える時季はもう少し寒くなってからだろう！　さすがにそれくらいは私でも知っているぞ！」
氷華草が生えている時季は、名前に氷と入っているだけあって、薬草に詳しくなくてもわかりやすい。なので、アル様でも知っているものだったのだろう。
「でも、全盛期が冬なだけで、今の時季でも生えていないってことはないですしね」

「生えていたとしても、そう簡単に見つかるわけがないだろう！」
「じゃあ、運が良かったんですね」
「……運。そうか、これが度々話題になるタクミ達の強運ってことか」
アル様は自己完結したようで、納得しているようだったがっくり項垂れてもいた。
まだ街を出てそれほど時間は経っておらず、森にも着いていない状態だが……アル様は既に疲れていそうである。
「アル様、大丈夫ですか？」
「忘れていたが、前にタクミ達と迷宮に行った時もこんなふうだったな」
「そうでした？」
「そうだった！」
ん～、一緒に迷宮に行った時か～。あの時は……裏ルートを見つけたくらいだったと思うんだけどな～。
「「アル様、氷華草はいる？」」
「ん？」
「去年だったかな？　城で不足しているってことで、フィリクス様に買い取ってもらったんですよ。だから、また必要なら売りますよってことですね」
アレンとエレナの言葉だけではアル様には意図は伝わらないと、僕は慌てて補足を入れる。

「ああ、そういうことか。私では在庫などはわからないから、帰ってから確認し、返事をするっていうことでもいいか？」
「うん、いいよ～」
「でもまあ、たぶん時季前ってことで不足していそうだし、買い取る方向になると思うから他に売らずにいてくれると助かる」
「わかった～。――だって、お兄ちゃん」
アレンとエレナは、氷華草を僕に差し出しながらアル様に了承する。
在庫管理や売却は僕の仕事ってことだね。
「あっ！」
「今度は何だ⁉」
「リリエ草～」
「よし、一般的な薬草だな！」
アレンとエレナの「あっ！」という言葉に、アル様が敏感になっている。
「それと」
「それと⁉」
「ヒカリ草！」
「ヒカリ草？　さすがにそれは何か知らない！　タクミ、一般的な薬草だな⁉」

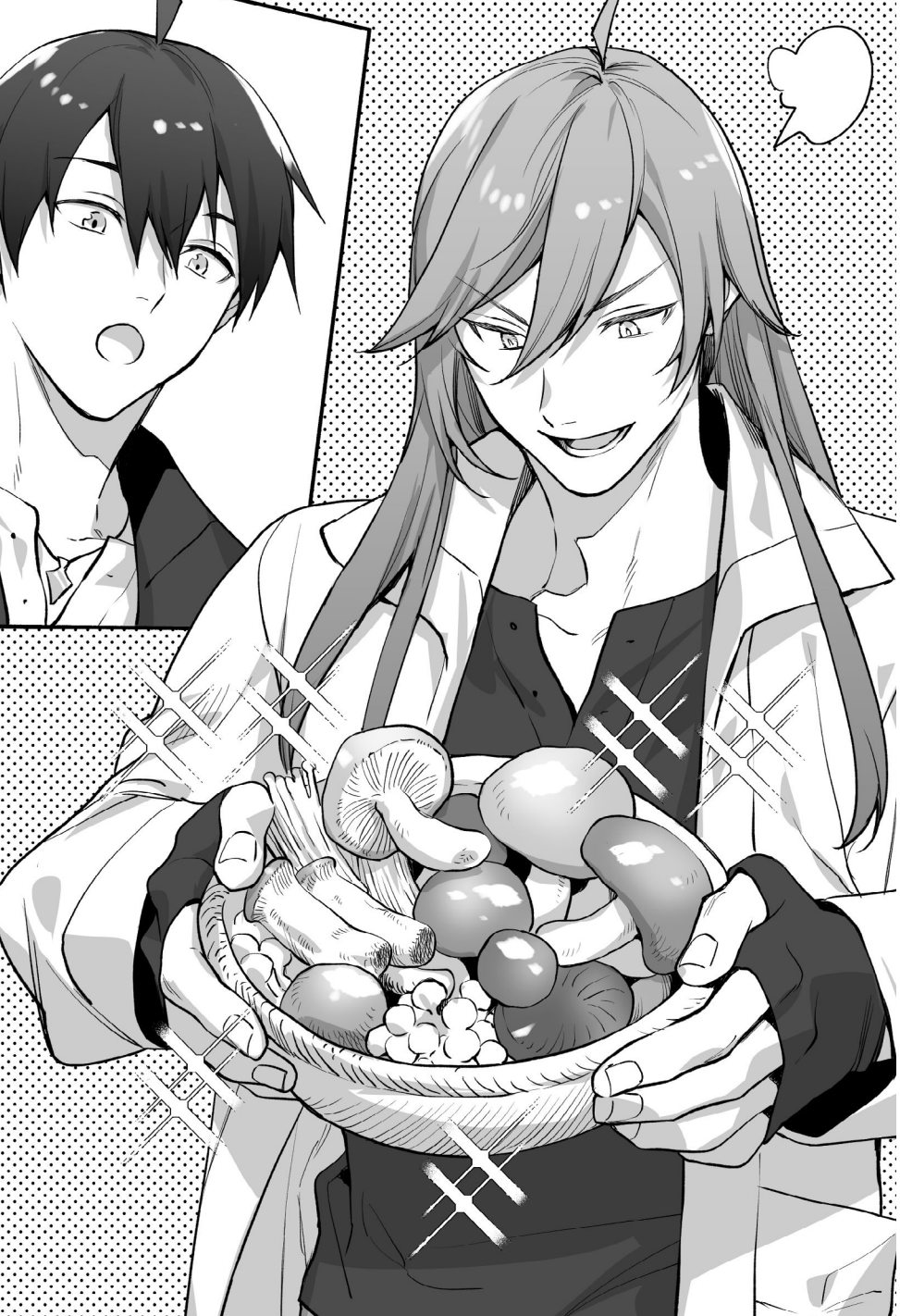
「……」
僕は「ヒカリ草はそこそこ稀少（きしょう）な薬草です」……とは言えず、アル様からそっと視線を逸らすことにした。
「タクミ⁉　何故、視線を逸（そ）らす！」
「ははは～」
「おい⁉　まさか、一般的な薬草じゃないのか⁉」
真実を告げたくないから視線を逸らしたのに、アル様が追及を止めてくれない。
「まあ、細かいことはいいじゃないですか～」
「そうは言ってもな！」
すると、ここまで黙っていたナジェークさんが口を開いた。
「アル様、聞かないほうが自分達の身のためでは？」
「……それもそうだな」
助けてくれた？　というか、保身のためにアル様を止めてくれたようだな。
「ところで、タクミさん。このパステルラビット達はいつまで抱いていれば良いのでしょうか？」
「あ～……手を空けていないと落ち着かない感じですか？」
「ええ、そうです」
そして、その流れでナジェークさんは、自分が抱いているパステルラビットを視線で示してくる。

護衛の騎士であるナジェークさんは、手を塞いですぐさま剣を抜けない状態でいるのは嫌なのだろう。……というか、単にパステルラビットを持て余している？
「下ろして大丈夫ですよ」
「タクミ、逃げるんじゃないか？」
「まあ……大丈夫だと思いますよ」
ナジェークさんは恐る恐るとパステルラビットを地面に下ろす。
すると、パステルラビットは逃げるどころか、ナジェークさんに懐いたように足下から離れない。
「やっぱり大丈夫でしたね」
「何でだ!?」
「……本当に不思議ですね」
アル様が叫び、ナジェークさんが呆然としている。
逆に逃げ隠れするパステルラビットを見てみたいと思うのは……贅沢なことだろうか？
「お兄ちゃん、また氷華草があったよー」
「エレナはね、ビリビリ草とピリピリ草を見つけたの～」
「我は、キノコを採って来たぞ！　どうだ、美味しそうであろう！」
いつの間にかカイザーも子供達と採取をしていたようだ。
まあ……毒キノコばかり採ってきたようだけどね。

「「カイザー、食べられないキノコばかりだよ～」」
「なぬ!?　これは食べられないのか!?」
「「毒キノコ～」」
「何てことだ！」
子供達に指摘を受けて驚いているので、キノコの見分けなど考えもせずに手当たり次第に採取してきたのだろう。
「薬の材料になるキノコもあるから、何かしらには使えるよ」
「……そうなのか？」
毒抜きして薬に使ったり、毒成分を殺虫剤のようなものに使ったりと、まったく使う要素がないキノコはなさそうだ。
それを伝えると、沈みきっていたカイザーが、少しだけ浮上したようだ。
「カイザー、これからだよ」
「カイザー、教えるよ～」
「うむ、これから勉強して、しっかり覚えれば良いのだな」
子供達に慰められているカイザーだが、落ち込んではいなさそうだ。
「いや、カイザーなら【鑑定】を使えば、いいんじゃないか？」
「「それがあった！」」

勉強して知識として持っていることは良いことだけど、便利なスキルは使うべきだろう。
「それでタクミ、その毒キノコはどうするんだ？　猛毒のものもあるじゃないか！」
「とりあえず、薬に加工してもらおうかと思っています。というかアル様、キノコに詳しいんですか？」
アル様は、ひと目で猛毒キノコを見分けていた。
「キノコというか、いろいろな毒とその毒の対処法については学んでいるぞ。立場上、必要だからな」
「ああ、なるほど」
毒殺とかに対する知識か。王族って本当に大変だな～。
「今度、上級迷宮で特級の状態異常回復のポーションを探してきますね」
「それはありがたいが……滅多に手に入らないポーションだな」
「特級はそうですよね～」
「いや、特級に限らず、状態異常回復のポーションの流通は少ないぞ」
「え、そうなんですか？　下級でも？」
「ああ、そうだな。まあ、誰もが何かあった時のために常備していたいってことだな」
「へぇ～……」
そうなんだな～。

冒険者にとっては、体力回復のスタミナポーションや魔力回復のマナポーションも含めてどんなポーションでも必要だし、持っていたい装備だ。
だが、街で暮らす人達にとっては体力回復や魔力回復より、傷を癒すヒーリングポーションや状態異常回復ポーションのほうが需要があるのだろう。というわけで、後者のほうが出回らなくなるということだな。
「「ポーション、欲しいの？」」
「そうだね。解毒のものが特にね」
「「探す？」」
「そうだね。今度、迷宮に行く時は、しっかり探そうか」
「「わかった～」」
あとは……ヴァンパイアのヴィヴィアンに尋ねてみてもいいかな？
さらっと特殊な薬を持っている人物だし、確認だけはしておこう。
「期待しないで待っているから、手に入ったら売ってくれ」
「絶対に見つけるね」
「期待して待っていてね」
「いや、待て！　アレンとエレナが張り切ると嫌な予感がするから、ほどほどに頑張ってくれよ」
「「全力で頑張る！」」



あらら～、アル様がアレンとエレナのやる気スイッチを全力で踏み抜いてしまったようだ。
これは近いうちに迷宮に行くことになりそうだな。
「タクミ、タクミ！　今度は食べられるキノコを採ってきたぞ！」
毒キノコから話題が逸れてポーションの話をしている間、カイザーはキノコ採りに再挑戦していたようだ。鑑定で見分けた食べられるキノコを籠にたっぷりと採取し、満面の笑みで戻ってきた。
「いっぱい採ってきたな～」
「うむ、今度はしっかりと確認しながら採ったので、食べられるものばかりだぞ！　タクミ、これで美味しいものを作ってくれ」
「まあ、いいけど……キノコって炒めものとかソースに入れるか、スープとか混ぜご飯になるぞ？
それでいいか？」
「うむ、そこは任せるぞ！」
あ、キノコのパスタとかもいいな！
というか、僕の中でパスタブームが来ているかも？
いろんなキノコ料理を考えていると、アル様が声を上げた。
「タ、タクミ！　そ、それは、幻のキノコではないか！」
「「「幻のキノコ？」」」
アル様の言葉に、僕と子供達、カイザーは揃って首を傾げてしまった。

幻？　カイザーが採ってきたキノコの中にそれがあるのか？
「それだ！　それ！　ブラン茸とノワール茸だ！」
アル様が示したキノコを鑑定してみると、確かにブラン茸とノワール茸と出た。だが、僕にはただの白いキノコと黒いキノコにしか見えなかった。
鑑定にも特に〝幻〟とか〝稀少〟などの記載はないし……あ、でも薬に使えるようだな。
「この二種類が幻なんですか？」
「ああ、その二種のキノコを使って解毒剤が作れるのだが、それはキノコ全般の毒に有効な薬になるんだ！　しかし、なかなか見つけられないキノコで、かなり高値で取引されているはずだ」
毒キノコ全般に効く薬か～。キノコの食あたりにはとても良さそうな薬だな～。
幻かどうかはともかく、薬としては有用性がありそうだ。
「カイザー、ブラン茸とノワール茸はアル様に譲ってあげて」
「人には良い薬になるのなら、重要だな。うむ、問題ないぞ」
「いいのか⁉」
カイザーも快く承諾してくれたので、ブラン茸とノワール茸はアル様に譲ることにする。
アル様から欲しいと言われたわけではないが、嬉しそうにしているところを見ると欲しかったのだろう。
しかし……毒に苦労しているんだろうか？　本当に心配になってくるな～。

「それにしても、カイザーはこのキノコをよく見つけたな～」
「む？　そのキノコは我が育てたものだぞ？」
「ん？　んん？　どういうこと？」
「生えてきたばかりの小さなキノコがあったのでな、魔力を注いでみたのだ！」
「いや、何やっているんだよ」
「そうしたら、みるみる大きくなって、そのキノコになったな！」
「はぁ⁉」
いや、本当に何をやっているんだよ！
とりあえず、もう一度ブラン茸とノワール茸を鑑定してみると、生育過程に魔力が豊富に必要なことがわかった。
「え、魔力で育つキノコってこと⁉」
何となく幻と言われる所以がわかったかもしれない出来事だった。
「魔力で育つのか⁉」
「そのようですね～……」
僕も驚いたが、アル様とナジェークさんもひっそりと驚いていた。
「タクミ達と出かけるのは、疲れるな～……」
アル様は長ぁーーーーーい溜め息をついた。

「アル様、街を出たばかりで、まだそこの森にも着いていないですからね」
「いや、もう帰ってもいいんじゃないか？　手に入れたものを売却したら、既に結構な稼ぎになっているだろう。――というか、ナジェーク！　おまえも少しは指摘を手伝え！　空気になろうとするなよ！」
アル様はもう帰りたいようだ。
そしてナジェークさんは、アル様の後ろでひっそりと存在感を消すようにしていた。なので、お疲れ気味のアル様が、文句を言っている。
「いえいえ、護衛の私が出しゃばって主より先に発言するなどできませんよ」
「建前で逃げるな！」
ナジェークさんは全力で関わらないようにしようとしている。
「はぁ……タクミさん、アルフィード様が煩いようですが、問題ありませんか？」
「なっ!?　ナジェーク！　何故、私のほうだ!?」
「今回は、タクミさん達に我々が同行しているのですから、タクミさん達の行動に指摘するのは違うかと思いまして」
「確かに……そうだが……」
まさかの、ナジェークさんは叫び続けているアル様のほうに遠回しな苦言をする。
まあ……僕達はいつも通り採取したりしているだけなので、止められる謂れはないのか～。

「「アル様、頑張れ！」」
「っ～～～……」
アレンとエレナが少しだけからかっている雰囲気を出すと、アル様はどこか悔しそうな顔をしていた。
「タクミ、タクミ！　ブラン茸とノワール茸がまたあったから育てたぞ～」
「えっ!?」
カイザーはちょっとした時間を無駄にはせず、せっせと追加のキノコを採取していたようだ。
「……アル様、いりますか？」
「本当に！　……おまえ達は、いや、いい」
「いらないんですね」
「いや、是非売ってくれ」
「え、あ、はい」
アル様……だいぶお疲れなのかな？　言動が定まっていないような？
「あっ！」
「今度はどうした？」
「「パステルラビット、見つけた～」」
少しも落ち着く暇もなく、アレンとエレナはパステルラビットに向かって駆け出していく。

「また見つけたのか⁉」
「タクミさん達と行動すると、滅多にないことを経験できますね」
アル様とナジェークさんは呆れ気味だ。
「「四匹いたよ～」」
これでパステルラビットは全部で十匹だな。
「「あっ！」」
「またか⁉　早いぞ！　今度は何だ？」
「「何かいる～」」
子供達はパステルラビットを連れてきて、僕達の足下に置いた瞬間にまた何かを見つけたようだ。
アル様がその早さに叫び声を上げる。
「あれは……グラトニーラビットかな？」
「「おぉ～、初めてだ～」」
「そうだな」
アレンとエレナが見つけたのは初見の魔物だ。いるのは……二匹かな？
グラトニーラビットは、両手に乗るくらいの大きさの、可愛らしい見た目のウサギの魔物だ。パステルラビットみたいな魔物だが、それよりはちょっと強いEランク。身体の色は真っ黒で赤い瞳（ひとみ）の個体だ。あ、ちょっとだけ耳が短いのが特徴だな。

そして、何と言っても主食が骨という……驚きの特性があるウサギである。
「「お兄ちゃん、骨はある？」」
「何の骨でもいいんだったな。それなら、ウルフの骨とかでいいのかな？」
僕は《無限収納（インベントリ）》からウルフの骨を取り出し、アレンとエレナに渡す。すると、二人はグラトニーラビットに向かっていった。
まあ……食べるものは普通じゃないが、パステルラビットと同様の愛玩（あいがん）動物に近い魔物なので大丈夫か～。
「また珍しい魔物と遭遇したな」
「やっぱり珍しいんですか？」
「ああ、グラトニーラビットは森の奥深くに棲（す）む魔物だからな」
「アル様、詳しいんですね」
「アルフィード様は、小動物っぽい生きものが好きですからね」
「ナジェーク！　バラすな！」
「え、そうだったんですか⁉」
アル様が小動物好きとは知らなかったな。
確かに子供達に手渡されたパステルラビットは、ずっと抱いたままだな。
……ということはアル様って、ふれあい広場の責任者になったのは、嬉しいことだったのかな？

そして、ガディア国の王妃、グレイス様は、アル様が小動物好きって知っていて話を振ったのかな？
「「仲良くなったよ～」」
そうこうしているうちに、アレンとエレナが二匹のグラトニーラビットを連れてきた。
「えっと……その子達は、どうしたいって？」
「パステルラビットと一緒！」
「連れて帰る！」
「……そうか」
グラトニーラビットもペットになることが希望のようだ。
ペット希望の魔物って何なんだ⁉　と思うが、あまり戦うことができない魔物の処世術なのかもしれないな。
「アル様、どうですか？」
「どうですかって……それはパステルラビットと同様に、城で飼えってことか？」
「アル様がよければ、ですね」
「私は構わないが、態勢が整うまではタクミが面倒を見てくれなくては困るぞ」
「ええ、それはもちろん引き受けます」
「それなら、喜んでこちらで請け負うぞ！」

早く態勢を整えなければ……と呟くアル様は、ちょっとわくわくしている様子だ。
本当に小動物が好きなようだ。
「そういえば、買い取ると言うと言葉が悪くなるが、パステルラビット達の代金はどうしたらいい？」
「いやいや、この子達を売り買いするつもりはないので、普通に引き取ってください。何でしたら、餌代とかの要求をしてくれてもいいですよ？」
どちらかといえば、僕達が押しつけているようなものだしな。
逆にこれから掛かるだろう餌代を要求されてもいいくらいだ。
「野菜くずと食用肉から出る骨なら、城の厨房に腐るほどあるから問題ないな」
「あ、確かに」
餌は別途で購入しなくてはならない……ということはなく、本来ならゴミとして処分されるようなもので賄えるので問題ないんだな。
「それにしても……種族が違っても喧嘩したりしないんだな」
アル様が何を言っているかというと、僕達の足下で仲良くしているパステルラビットとグラトニーラビットだ。同じウサギの魔物だからなのか、もう仲良くなっている。
「連れてくる時にね」
「ちゃんと説明しておいたよ」

「ん？　えっと……もしかして、グラトニーラビットにパステルラビットと仲良くするように言っておいたのか？」
「そうそう」
「……そうか」
子供達が前もって説明しておいたから仲良くしているのか？
じゃあ、本来は険悪な状態とまでは言わないが、もっと疎遠な関係になっていたかもしれないってことか？
まあ、僕が変に想像しているだけで、普通に仲良くしていたかもしれないか～。
「アル様、グラトニーラビットを撫でたり抱いたりしないんですか？」
「いや、あの……いいのか？」
「その子達が嫌がるようならやめたほうが良いですけど、すり寄ってきていますからいいんじゃないですか？　ほら、待っていますよ」
アル様がグラトニーラビットに触れたくてそわそわしているようだったので、早く触るように勧める。だって、グラトニーラビット達もアル様にすり寄っていたしな。
「ほらほら」
「あ、ああ！」
僕はアル様が抱いているパステルラビットをアル様の両肩と頭の上に乗せ、グラトニーラビット

を渡すと、アル様はすかさず抱き寄せる。
「「おぉ～、もふもふがいっぱい！」」
「もっといく？」
「もっと乗せる？」
アレンとエレナは、先ほどまでナジェークさんが抱いていた三匹のパステルラビットもアル様に乗せようとする。
「さすがにもう無理じゃないかな？」
「「そっか～」」
「うん、もう増やすのはやめてくれ！　むしろ、頭のは降ろしてくれないか？」
アル様はバランスを取るのに苦労しているようなので、頭の上のパステルラビットだけはアル様の腕の中に戻す。
「「あっ！」」
「え、今度は何だ？」
「「今度は薬草！　ちょっと待ってね～」」
アレンとエレナは再び薬草を発見すると、駆け出していく。
アル様は驚きの声を上げるが、ウサギ達がいるから動きは最小限だ。
「どうしよう。森に辿り着けないな～」

僕の呟いた言葉を聞いて、アル様とナジェークさんが笑っていた。
「タクミ、森は諦めるべきだな」
「いやまあ、そうなりそうですね」
数歩進むたびに脱線していれば、確実に森は無理だろう。
今もちょっとした茂みで一生懸命に薬草を採取しているしな。
「ところで……あの子達は、今度は何を採取しているんだ？」
「見える限りでは、リリエ草とかフェンゼ草のような一般的な薬草ですかね」
「そうか、それなら安心だ」
よく見つかる薬草とわかって、アル様はわかりやすく安堵していた。
「「お兄ちゃん、見てみて～」」
「何だ？　何だ？」
ほっとしていたアル様が、駆け寄ってくる子供達にびくついていた。
「これ、香り石じゃない？」
「海石の仲間！」
戻ってきた子供達は、それぞれの手に緑がかった灰色の石を持っていて、それを掲げて僕に見せてくる。
香り石というのは、ほのかに匂いがする石で、そのまま置いて使用したり、加工して香水などに

使われたりするものだ。
「確かに香り石の一種、森石だな」
「「やった～」」
子供達は以前、海石を見つけてから、違う種類の香り石にも興味を持っていた。なので、見つけられて嬉しそうである。
「へぇ～、本当に森林の中にいる時の匂いがするな～」
「「あっ、本当だ～」」
「あれ？　アレンとエレナはまだ匂いを嗅いでいなかったのか？」
「「忘れてた～」」
森石を見つけたことが嬉しくて、匂いまで確かめていなかったようだ。
「じゃあ、香りはどう？」
「「ん～？　良い匂い？」」
「疑問形なのか？」
「「えっとね～……あれ！　落ち着く匂い！」」
「あ～、確かにそうかもな～」
森林の香りにはリラックス効果があり、アロマとかにも使われていたはずだ。
落ち着くと言われれば納得できる匂いである。

「「もっと探してくる！」」
アレンとエレナは、今度は香り石探しを本格的にするつもりのようで、先ほど森石を見つけた場所に戻っていった。
「香り石か……まだ出回っている類のものだな」
アル様は稀少なものに対してとても敏感になっているようで、そうではなくて安心している。
「「お兄ちゃん、大変大変！」」
「どうしたんだ？」
森石を探しに行ったばかりのアレンとエレナが、すぐに慌てた様子で戻ってきた。
すると、またアル様が、びくりと肩を揺らしていた。
「「これ！」」
「ん？　これは……花石か？」
「「そう！」」
今度は香り石の一種である花石を見つけたようだ。二人ともピンクがかった灰色の石を持っている。
森石に続けて見つけたことは凄いが、何故それが大変なのだろうか？
「見つけたのは凄いけど、それが大変なのか？」
「「匂いが違うの！」」

「こっちはバラ！」
「こっちはユリ！」
「えっ、そうなの？」
花石の香りは特定の花の香りではなく、複数の花を組み合わせたフローラルっぽい香りがするものだと勝手に思っていた。
「何だ、タクミは知らなかったのか？　森石や海石は特定の匂いのものしかないが、花石と恵石はいろんな匂いのものがあるんだぞ」
アル様が詳しい特徴を知っていたらしく、教えてくれた。
「「アル様、めぐみ石ってなーに？」」
「恵石は果実の匂いがする香り石だよ」
「「へぇ～」」
花石に種類があることもだけど、恵石っていうものがあることを僕は知らなかったな～。
「タクミも知らなかったのか」
「ええ、初めて聞きました。恵石って、レモネーの香りとかイーチの香りがする石ってことですよね？」
「そうだ。ただ、恵石だけは他の香り石と違って、迷宮内でしか見つからないらしい。だから、その石だけは他の香り石より稀少なものになるな」

海の近くに海石、森や花のある場所の近くに森石、花石があるわけだが、恵石は果実が実る木の近くというわけではないんだな。
「アル様、どこの迷宮にあるの⁉　どこ！」
子供達が、恵石に食いついた。
でもまあ、僕もどんな香りの石があるのか気になるな～。
「……どこと決まった迷宮ではなく、迷宮内で果実が実っているところの近くにあるらしいな。その実っている果実と同じ香りの石がな」
「「へぇ～」」
迷宮内で果実を見つけたことはあるが、その近くで石を探したことはなかった。
もしかしたら、僕達が気づかなかっただけで、近くに落ちていたのかもしれないな～。
「お兄ちゃん、今度探しに行こう」
「迷宮に！　恵石探し！」
「そうだな。迷宮に行ったら果実探しと一緒に恵石探しをしてみるか」
「うん！　楽しみだね～」
迷宮には定期的に行くし、果実探しは迷宮内だろうが外だろうがいつもやっていることだ。そこに恵石探しが加わるくらい問題ない。きっと、恵石探しは習慣になるんだろうな～。
「アル様、アル様、ブラン茸とノワール茸があったぞ！」

「はぁ⁉　またかっ‼」
アル様にいろいろと教わっていると、一人で周辺をうろうろしていたカイザーが戻ってきた。
アレンとエレナの採取物では安堵していたアル様だが、カイザーの採取物を見て驚愕していた。
しかも、今回は両方のキノコが複数個あるようだ。カイザーはブラン茸とノワール茸をよく見つけるな～。
「カイザー、その二つのキノコは魔力で育てないといけないから、元は生えてきたばかりの小さなものだろう？　よくそんなに見つけられたな」
「む？　何となくコツを掴めてきたので、わりと簡単だぞ？」
「そうなのか？」
「うむ、周辺に魔力を撒くように放出するのだ。そうすると、元は小さなキノコでもにょきっと大きくなる。それを見逃さずにさらに魔力を注いで育てるという寸法だ！」
「わ～……見つけてから魔力で育てているんじゃなかったんだな」
見つける前に魔力を放出していたのか～。ということは、結構な魔力の無駄遣いをして見つけていたんだな。だがまあ、効率は悪くないのかな？
「「おぉ～、カイザー、凄いねぇ～」」
「そうであろう、そうであろう」
アレンとエレナがカイザーを褒め称え、カイザーは嬉しそうに胸を張る。

「アレンも探してみたい」
「エレナも見つけたい」
「うむ、ではやってみるか？」
「「うん！」」
止める暇もなく、アレンとエレナ、そしてカイザーはブラン茸とノワール茸を採りに行ってしまった。
「魔力は少しで構わない。周囲に薄（うす）く放出するだけで良い。大事なのは、その魔力によって変化するものがないかどうかを見逃さないことだ」
「「わかった～」」
僕達から少し離れた場所でカイザーのレクチャーを受けて、早速キノコ探しを始めたようだ。
「「むむむ～～～……とりゃあ！」」
「うむ、魔力の放出は問題なさそうだな。あとは周囲の変化を観察する」
「ん～？　……アレンのほうはなさそう？」
「あっ！　あれ！　エレナのほうはあった！」
「では、エレナ。その個体に魔力を」
「うん！」
エレナが変化のあった場所に集中的に魔力を送る様子を見せると、にょきっと大きくなったキノ

コが出現した。
「やったー。ブラン茸だ！」
「うむ、立派なキノコが採れたな」
エレナがブラン茸を見事に採取した。
しかし……実際に採取方法を見ると、とんでもないやり方だよな～。
「「……」」
アル様とナジェークさんは言葉もないのか、目を見開いたまま固まっていた。
「む～、アレン、もう一回やってくる！」
エレナだけが採取できたことが悔しかったのか、アレンは場所を移動してまた魔力を放出していた。
「エレナももう一回やってくる～」
エレナも場所を移動して、再度挑戦するようだ。
「アル様、ブラン茸とノワール茸がたくさん手に入りそうな予感がします」
「……私も同じ予感がするな。子供達はもう一回ずつくらいで終わる性格ではないよな？」
「絶対に終わらないと思います」
「だよな～」
確実に、間違いなく、自信を持って言える。一個や二個じゃ終わらずに、たくさんのキノコを採

取してくるだろうと！
「一応確認しておきますけど……全部いります？」
「……保留でもいいか？　私では薬にしたものが日持ちするかどうかも、そもそも材料として保管できるかどうかもわからないのでな」
「あ～、それは重要ですよね。まあ……売るにしても、使うにしても、あと……食べるにしても？アル様からの返答を待ってからにします」
「食べるのか⁉」
「……食用にできるみたいなので、一応候補に入れてみました」
まあ、薬の材料なので、食材として使うつもりはないんだけどな。
「「美味しいの？」」
「っ！　食べられるキノコだけど、美味しいかどうかはわから……――えっ⁉」
いつの間にか戻ってきていた子供達が、背後から声を掛けてきたので一瞬驚いたが、食用について話しつつ振り返った。
すると、二人の頭の上に異変が起きていて、僕は言葉を詰まらせてしまった。
「アレン、エレナ……それは何だ？」
アレンとエレナのそれぞれの頭の上に、大人の握り拳サイズのモモンガが乗っかっていたのだ。
お腹側は真っ白、頭や背中側は薄茶色で目がくりくりとしている……いかにも小動物っていう感じである。
「「シュガーモモンガ！」」
「いや、種族を聞いたわけじゃないんだけど……」
シュガーモモンガは、甘いものが好物なFランクの魔物だ。これまたパステルラビットと同様に、あまり戦闘を好まない種族である。
「どうして頭の上にシュガーモモンガがいるんだ？」
「「仲良くなったの」」
『『キュイ』』
シュガーモモンガも子供達と一緒に返事をする。
「……そうか、仲良くなったか」
シュガーモモンガは、アレンとエレナから貰ったのか、両手で飴玉（あめだま）を抱えて夢中で舐（な）めている。
森の中での甘いものと言えば果実や樹液などで、飴玉は初めてだからだろうな。
「念のために聞きたいんだが、この子達はどうするんだ？」
「一緒に行きたいって」
「アル様、いい？」
『『キュイ』』
ふれあい広場でのペット候補らしい。

シュガーモモンガ達も可愛さをアピールするように首を傾げている。
「……タクミ」
「……アル様、駄目なら駄目って言って良いですよ。その場合は、責任を持って僕が飼い主を探すか、僕の契約獣にしますから」
ふれあい広場が駄目でも、もしかしたらルーウェン家で受け入れられるかもしれない。それが駄目でも、飼いたいっていう人はいるかもしれない。あとは普段は影の中ばかりになってしまうが、パステルラビットのシロ達のように僕の契約獣にしてもいい。
「いや、まあ……大人しそうな魔物だから大丈夫だとは思うが、返答は後日にさせてくれ」
「もちろんです。どちらになっても、責任を持って面倒を見ますから！」
「私としては、喜んで受け入れたいんだがな～」
「ああ、アル様好みでした？」
「っ！」
小動物好きのアル様の心はがっちり掴んでいるようだ。
そうなると、ふれあい広場行きが濃厚かな？　アル様が交渉を頑張りそうだしな。
「そういえば、キノコ採りは終わったのか？」
「「満足した！」」
「うむ、頑張ったぞ～」

待っていました！　とばかりに、カイザーがブラン茸とノワール茸が入った籠を差し出してくる。
「……えっ？　いつの間に、こんなに採取したんだ？」
「子らが少々魔力を放出させ過ぎてな。運の良いことに、そこに群生していたキノコが一気に育ったのだ」
「……群生地にかち合ったか～」
思っていた以上のキノコを差し出されて驚いたが、どうやら強運が作用したようだ。
「と、とりあえず、魔物もだが、キノコや薬草も今日はこれ以上増やさないでくれ」
「ははは～」
アル様の精神は、かなりすり減っている様子である。
パステルラビット十匹に、グラトニーラビット二匹、シュガーモモンガ二匹。それに幻のキノコがたっぷり。うん、疲れるかもな。
「よし、アレン、エレナ、カイザー、今日はもう帰るよ」
「「えぇ!?」」
「なぬ!?」
さすがにこれ以上はアル様の負担になりそうなので、驚く子供達に言い聞かせて、僕達は森の入り口にすら辿り着く前に、引き返すことになった。

帰り道では無難な薬草採取だけで終わり、無事に街に戻ってきた僕達は、門を入ったところでアル様達と別れることになった。
「いいか！　馬車を手配するから、タクミ達はここから馬車で帰るんだぞ！」
「「えぇ～、何で～？」」
「パステルラビットだけでなく、グラトニーラビットとシュガーモモンガまで連れているんだぞ！　目立つ！　安全のためにも馬車で帰るんだ！　わかったな！」
「「目立つかな～？」」
「間違いなく目立つだろう！」
アル様は門のところにある小部屋に僕達を押し込むと、自分達は馬を借りていた。
「急いで帰ったね～」
「慌てていたね～」
もふもふ達が増えたこと、幻のキノコを手に入れたことの報告をすぐにしたいと、アル様達は急いでいたようだ。
まあ、僕達が思いっ切り仕事を増やした感じだしな。本当に申し訳ないが、ふれあい広場のために頑張ってほしい……と思いながら、ゆっくりと馬車で帰った。

立ち読みサンプル
はここまで

第二章　大盤振る舞いをしよう。

「カイザーも無事に街に入れたな」
「うむ、これでこそこそしなくて済むな」
本来の目的であったカイザーの身分証使用の試しも済んだ。
まあ、偽装だけど本物の身分証……というややこしいものだけどな。
「さて、早めに帰って来たから、まだ時間はあるな」
パステルラビット達を連れてルーウェン家に帰ってきたが、まだ日暮れまでは時間がある。
「ねえ、もう一度出かけることになるんだけど、ソルお爺さんのお店に注文に行きたいんだ。いいかな？」
ソルお爺さんというのは、王都で魔道具屋を構える職人さんのことだ。いつも色々な魔道具をお願いしている。
「「いいよ～」」
「我も構わないぞ」
明るい時間に帰って来たので、再び出かけることにした。